

論文要旨

【学位論文題目】 子どもの協調運動の発達に関する研究 ―行動特性およびQOLとの関連―

【氏名】 戸次 佳子

本論文の目的は、子どもの協調運動の発達と行動特性およびQOL (Quality of Life) との関連を明らかにすることである。協調運動とは、目と手の協応などを要する指先の細かい運動から、姿勢のバランスや制御といった全身の運動まで、日常の諸動作に関わる重要な運動である。協調運動は脳機能の発達と関係し、生得的に身体の協調にぎこちなさを示す子どもたちがいることが明らかになっている。先行研究における報告によると、協調運動に障害 (Developmental Coordination Disorder (DCD) 発達性協調運動障害) のある子どもたちは、子どもたち全体の5~10%程度いるとの報告があり、行為障害、多動・不注意などの併存や、自尊感情の低下などの行動特性および心理面への影響が認められている。

一方、幼児期から小学生にかけての運動発達は連続的に発達途上にあり、協調運動の発達と行動特性および心理面との関連を発達の視点から検討することは、DCDの子どもに限らず、定型発達の子どものたちにとっても重要である。そこで、本研究では、定型発達の子どもの (東京都内の小学校の通常学級に在籍する、2年生100名と5年生117名) を対象として、保護者記入による質問紙調査と子ども本人の協調運動実技調査を行い、統計的な分析・検討を行った。質問紙調査には、協調運動の評価としてDCDQ-J (Developmental Coordination Disorder Questionnaire Japanese version) , 行動特性の評価としてSDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) 日本語版, QOL評価としてKINDL^R日本語版を用いた。また、子ども本人の実技調査には、「線たどり」「はさみの使用」「縄跳び (前跳び・後ろ跳び)」「ボール運動 (右手・左手)」の4種目を行った。

保護者記入の質問紙調査による検討を行った研究1では、保護者による評価をもとに、学年別男女別に各スコアを分析・検討し、その結果、協調運動の下位項目の「微細運動・書字」が、両学年ともに女兒の方が男児より有意に高いことが明らかになった。また、行動特性の下位項目のdifficulties (困難さ) の指標である「行為」が、2年生の男児において2年生の女兒より有意に高く、行動特性の下位項目のstrengths (強さ) の指標である「向社会性」が、5年生の女兒において5年生の男児よりも有意に高いことが明らかになった。QOLは、男女差よりも学年差が大きく、全般的に5年生よりも2年生の方が高いという結果であった。また、学年別男女別のすべてのグループにおいて、協調運動と行動特性の間、協調運動とQOLとの間、QOLと行動特性との間に有意な相関関係が認められた。定型発達児においても、協調運動の発達と行動特性およびQOLとの間に関連が認められ、身体の発達が、日常の行動特性や心理的な側面と切り離せないものであることが明らかになった。

実技調査の結果を学年別男女別に検討を行った研究2では、2年生から5年生にかけて、男女共に「線たどり」や「はさみの使用」の手指の微細運動の発達が認められた。さらに、「はさみ使用」においては、5年生女兒が5年生男児よりも有意に高いスコアを示し、女兒のはさみ使用における卓越した発達の実態が示された。

「縄跳び」や「ボール運動」の身体の協調運動は、男女共に、2年生よりも5年生のスコアが高く、特に「ボー

ル運動」で、5年生男児が5年生女児よりも有意に高いスコアを示した。したがって、男女で協調運動発達の特徴が異なり、2年生から5年生にかけて、男児は身体の協調運動が発達していく「身体統制優勢型」、女児は手指の協調運動が発達していく「微細運動優勢型」であることが示唆された。

研究1で行った保護者記入の質問紙調査と研究2で行った実技調査との関連を包括的に検討した結果では、女児よりも男児において、多くの項目で質問紙調査と実技調査との間に有意な相関が認められ、特に5年生男児においてその関連が顕著であることが明らかになった。また、2年生男児では、協調運動の発達全般と「自尊心」「家族関係」などのQOLとの関連、5年生男児では、「ボール運動」実技と「情緒」や「仲間関係」との関連が認められ、学年によって、協調運動と行動特性およびQOLとの関連が異なることが明らかになった。

以上の結果から、本研究によって、子どもの協調運動の発達は、行動特性やQOLと関連していること、その関連が学年や男女で異なることが明らかになった。すなわち、協調運動が発達していくことは、日常の行為や心理的な側面と関連が深い、その意味するものが年齢や性別によって異なることが示唆されたということである。本研究から得られたこれらの結果は、子どもと関わる保育士や教師が、子どもの協調運動の発達を、行動特性やQOLという視点と関連させながら見守る必要性を示している。また、子どもの行動特性を見て指導する際には、その行動特性の困難さの原因がどこにあるのかを見極めることの重要性を示唆していると言えよう。

本研究によって得られた知見が、子どもの協調運動の健やかな発達を支え、精神的な健康およびQOLを高めるための一助となれば幸いである。